

St. Luke's International University Repository

Report of the International Collaboration Research Workshop : Collaborative Research for Strengthening Community Health Nursing in Developing Countries : Action and Evaluation Research

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長松, 康子, 堀内, 成子, 平野, かよ子, 熱田, 泉, 成瀬, 和子, 小黒, 道子, 江藤, 宏美, 佐居, 由美, 市川, 和可子, 田代, 順子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/1314

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



報告

開発途上国における地域看護力強化のための人材育成協力（第2報）

長松 康子¹⁾ 堀内 成子²⁾ 平野かよ子³⁾
 熱田 泉⁴⁾ 成瀬 和子⁵⁾ 小黒 道子⁵⁾
 江藤 宏美⁶⁾ 佐居 由美⁷⁾ 市川和可子⁸⁾
 田代 順子¹⁾

**Report of the International Collaboration Research Workshop :
 Collaborative Research for Strengthening Community Health Nursing
 in Developing Countries :
 Action and Evaluation Research**

Yasuko NAGAMATSU, RN, PHN, MPH¹⁾ Shigeko HORIUCHI, NM, PhD²⁾ Kayoko HIRANO, RN, PHN, Ph³⁾
 Izumi ATSUTA, BHS⁴⁾ Kazuko NARUSE, RN, PHN, MP⁵⁾ Michiko OGURO, RN, CNM, MSN⁵⁾
 Hiromi ETO, RN, CNM, DNSc⁶⁾ Yumi SAKYO, RN, PHN, MN⁷⁾ Wakako ICHIKAWA, RN, PHN, MN⁸⁾
 Junko TASHIRO, RN, PhD¹⁾

[Abstract]

This workshop at St. Luke's College of Nursing in October 2006 was a part of the research study 'Strengthening Community Health Nursing in Developing Countries: Action and Evaluation Research.' This study is composed of five researches groups implementing their own projects in five different countries. We support women volunteer group in Myanmar, evaluation of in-service training in Fiji, development of curriculum at bachelor course in Afghanistan and master course in Kenya and health promotion using power point in South Africa. The researchers presented progress reports and discussed their results and future course of action with each other and three advisors from the U. K. and U. S. According to the discussion and advice by advisors, trial model of strengthening Community Health Nursing in developing countries was developed.

[Key words] international cooperation, educational programs, community health,
 international nursing cooperation, evaluation

[要 旨]

国際医療協力委託研究助成事業「開発途上国の地域看護のあり方に関する研究」の一環として、国際ワークショップを開催したので報告する。

本研究プロジェクトは、複数の研究機関と国際協力機関の協働による、開発途上国における地域保健の人材育成協力を目的としている。ミャンマーでは女性ボランティア支援、フィジーでは地域看護職継続教育評価、アフガニスタンでは看護学部カリキュラム開発、ケニアでは看護修士課程カリキュラム開発、南アフリカではパワーポイントを用いたヘルスプロモーションを行っている。初年度（平成17年度）に続き、平成18年10月にも、活動成果と今後の方向性を共有することを目的に、3名の国際看護専門家をアドバイザーに迎え、ワーク

-
- 1) 聖路加看護大学 国際看護学 St. Luke's College of Nursing, International Nursing
 2) 聖路加看護大学 母性看護・助産学 St. Luke's College of Nursing, Maternal Infant Nursing & Midwifery
 3) 国立保健医療科学院公衆衛生看護部 National Institute of Public Health, Public Health Nursing
 4) 国立看護大学校 国際看護学 National College of Nursing, Japan International Nursing
 5) 聖路加看護大学大学院博士後期課程 St. Luke's College of Nursing, Doctoral course
 6) 聖路加看護大学 看護実践開発研究センター St. Luke's College of Nursing, Research Center for Development of Nursing Practice
 7) 聖路加看護大学 基礎看護学 St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing
 8) 聖路加看護大学 成人看護学 St. Luke's College of Nursing, Adult Nursing

ショップを開催した。ワークショップでは、これまでの研究活動をふまえ、討議のうえ、人材育成協働モデル試案を作成した。

[キーワード] 国際協働, 教育プログラム, 地域保健, 国際看護協力, 評価

I. はじめに

聖路加看護大学プライマリヘルスケア WHO 看護開発協力センターでは、国際医療協力委託費助成（2005年度から2007年度）を受け、国立保健医療科学院、国立看護大学校との共同プロジェクトとして、「発展途上国の地域看護のあり方に関する研究」を開始した。本研究プロジェクトは、5つの開発途上国を研究パートナーとする5班から構成され、各国における国連開発目標達成を推進する地域看護のあり方（方略）を国際協働により明らかにすること、およびその国際協働プロセスから地域看護力の強化を可能にする効果的な国際協力方式を明らかにすることを目的としている。

初年度である2005年度は、各ホスト国のフォーカス地域における保健ニーズ、保健人材の力量とニーズ、保健システムや社会資源などに関するベースライン調査とアセスメントを調査し、同年11月には、調査結果の共有と、研究プロジェクトの方向性の確認・修正のために国際ワークショップを開催した。

研究2年目の2006年度は、初年度の調査結果をもとに研究を進め、10月に国際ワークショップを開催したので報告する。

II. 「開発途上国における地域看護のあり方に関する研究」における国際ワークショップの概要

1. 国際ワークショップの目的

ワークショップの目的は、各研究班の活動成果を共有する、国際的な看護専門家からの評価・助言を受け、地域看護強化のための協力計画の修正・再検討を行うことである。

2. 開催場所と日時

平成18年10月14日（土）に聖路加看護大学にて開催された。

3. ワークショップの方法

各班代表者が2006年度の成果報告を行った後、国際的に活躍する看護専門家より評価と助言を受けた。最後に全体を通しての研究の方向性や今後の課題についてディスカッションを行った。

4. 海外からの看護専門家

- 1) William Holzemer PhD, RN, FAAN: カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学部, 地域システム部門長, 教授, WHO コラボレイティングセンターセンター長
- 2) Barbara A. Parfitt PhD, MSc, RNT: 英国グラスゴー・カレドニアン大学教授, WHO 看護・助産開発協力センターグローバルネットワーク事務局長
- 3) Caroline White DrPH, RN: 聖路加看護大学客員教授, オレゴン・ヘルスサイエンス大学名誉教授

III. 各研究班の活動と今後の展望

1. ミャンマー班: ミャンマー連邦農村部における母子保健を強化する人材育成プログラム開発協力 (堀内成子分担研究者・聖路加看護大学)

日本のNPO法人 Association Medical Doctors of Asia (AMDA) が、プライマリー・ヘルス・プロジェクトの一環で2003年9月より地域母子保健向上を目指し組織化した女性保健ボランティアグループ (WVG) への支援を行った。初年度は2村の女性たちへのヘルスニーズに関するインタビューと、WVGの活動について調査を行った。その結果、女性たちのニーズは妊産婦健診受診率や予防接種率の向上と望まない妊娠の減少、そして怪我の応急処置であることがわかった。またWVG活動は継続していたものの、衛生材料の補充や活動の長期の見通しが困難な状況であることがわかった。

2006年度の調査では、A村は縫製業の忙しさと資金不足により活動が困難な状況であった。話し合いの末、これまでの活動は継続し、縫製業を営むものはその利益の一部を、他の者は家畜を育てて将来売却した際の利益を基金に入れることとした。B村でも活動資金不足が問題で、農業以外の事業をおこす、家畜を飼育後売却するなどWVG間の意見の相違が見られたが、最終的には活動継続することで同意した。WVGのいる2村と比較するため、コントロール村を検討中である。

2. ケニア班: 地域看護力強化のための人材育成プログラム開発協力: 修士課程 (田代順子主任研究者・聖路加看護大学)

ケニアでの活動においては、初年度の2005年度はstakeholdersへの根回しや、研究計画書を教育科学技術

省、保健省、ケニヤッタ国立病院倫理審査委員会に提出し研究実施許可を得た。2006年度は、ナイロビ大学地域看護学修士課程のカリキュラム開発に向け、ナイロビ市近辺のヘルスセンターの看護責任者、地域病院・国立病院の看護責任者、看護教育機関の教員、PHC 責任者、看護評議会代表、県看護責任者、看護協会専門職センター職員ら22名にニーズサーベイを行った。その結果、ケニアにおける地域看護学の修士修了生には、コミュニティへの関与と健康問題への対処能力の強化を目標に、研究遂行、教育、マネジメント及び政策立案への関与が期待されていた。だが、修士課程修了生の具体的なキャリアパスがないことと、地域看護学修士課程開発が地域にもたらしうる健康変容についての視点欠如が、今後の課題としてあげられる。

さらには、調査では明らかにならなかった、修士課程と現存のアドバンスドディプロマ (Post Basic Kenya Registered Community Health Nurse) コースとの相違をどうつけるのか、要望が多いPBKRCHNを修士課程に編入させるための単位認定制度の創設等、修士課程と現存のシステムとの整合性が求められる。今後は、経験のある地域看護師の意見や地域のリーダーに示唆をもらうなど、幅広い意見を取り入れ、カリキュラム開発を行っていく予定である。

3. 南アフリカ：南アフリカにおいて地域看護職が現場で行う健康教材の開発 (熱田泉分担研究者・国立看護大学校)

南アフリカではヘルスセンターにプライマリヘルスケア看護師が常勤しているものの、十分な地域訪問がなされていない。本研究はプライマリヘルスケア推進目的で、クワズナタール州第28保健地域に JICA の無償資金協力プロジェクトとして2002年に導入された、プロジェクターを用いたヘルスプロモーションスライドショー (HPSS: Health Promotion Slide Show) の評価を行った。2005年度の調査ではプロジェクト実施から3年を経ても、スライドショー活動は継続して使用され、その結果3年間で200編のスライドショーが作成されていることがわかった。内容は疾病予防など保健分野のほか、地域のイベントや学校建設など、他部門との問題共有に発展したものもあった。

2006年度には、さらに80編が作成された。地域訪問を行うことのなかったプライマリヘルスケア看護師がHPSS作成のために村々を訪問することで、道路のアクセスができ、コミュニケーションが円滑になり、住民との信頼関係が築かれ始めていた。指標によるHPSSの有効性を示すことが望ましいが、ヘルスプロモーションや保健教育では数値をすぐに示すことが難しいので、道路アクセス、コミュニケーション、プライマリヘルスケア

看護師の訪問などの変化を強調することが推奨されよう。

4. フィジー班：フィジーにおける地域看護強化のための地域保健看護現任教育開発協力 (平野かよ子分担研究者・国立保健医療科学院)

地域保健看護職の現任教育開発協力のために、中部地域保健省をカウンターパートとして、地域保健看護師に対する現任教育の効果の測定を行ってきた。初年度は、ヘルスセンターの看護職13人のタイムスタディと8名のベテラン看護師へのインタビューを行った。2006年度は看護職の看護技能のベースラインデータ調査を実施した。地域看護師114名を対象として、6領域 (35項目) について自己評価を行ってもらい、それぞれの上司 (シスター) にも同じ内容で地域看護師の技能を評価してもらった。

さらに111名のシスターに自分の看護技能を自己評価してもらうとともに、その上司 (主任地域保健看護師) にシスターの技能を評価してもらった。

その結果、地域看護師の自己評価は、「看護の質の管理」「知識と技術」で高く、地域管理やコミュニケーションで低かった。特に、社会資源のリストアップ、業務計画作成、健康問題の論議と分析、コンピューター技能などが低かった。全体として、地域看護師の自己評価はその上司による評価より低い傾向があった。一方、シスターは「看護の質の管理」「知識と技能」「コミュニケーション」において高かった。シスターの自己評価は上司による評価よりも高い傾向があった。これらの結果より、フィジーの看護師は分析能力、計画能力、議論能力に弱いことがわかった。来年度に同様の調査を予定している。

今後は看護職本人とその上司による評価の比較の意味を明確にする必要がある。本人と上司が評価を行うことで、その違いを比較するだけでなく、部下と上司と一緒に検討し、ニーズを明らかにし、変容させていくことにも意味がある。これはプロセスであって、単なる評価ではないので、アクションリサーチモデルを用いて、両者の会話、変化、教育が必要な理由、そのような能力が必要かなどの情報が有効であると考えられる。

5. アフガニスタン班：地域看護力強化のための人材育成プログラム開発協力 (田代順子主任研究者・聖路加看護大学)

アフガニスタンでは、看護師が著しく不足しているものの、学士看護師・修士看護師がほとんどいないため、看護教員のなり手がいないという悪循環に陥っている。初年度は、研修目的で来日したアフガニスタン医師と公衆衛生領域の政府高官に、健康問題と人材育成に関する聞き取り調査を行った。その結果、母子保健分野と女性保健医療従事者のニーズが高いことがわかった。

次年度は、2006年7月に開設されたカブル医科大学看

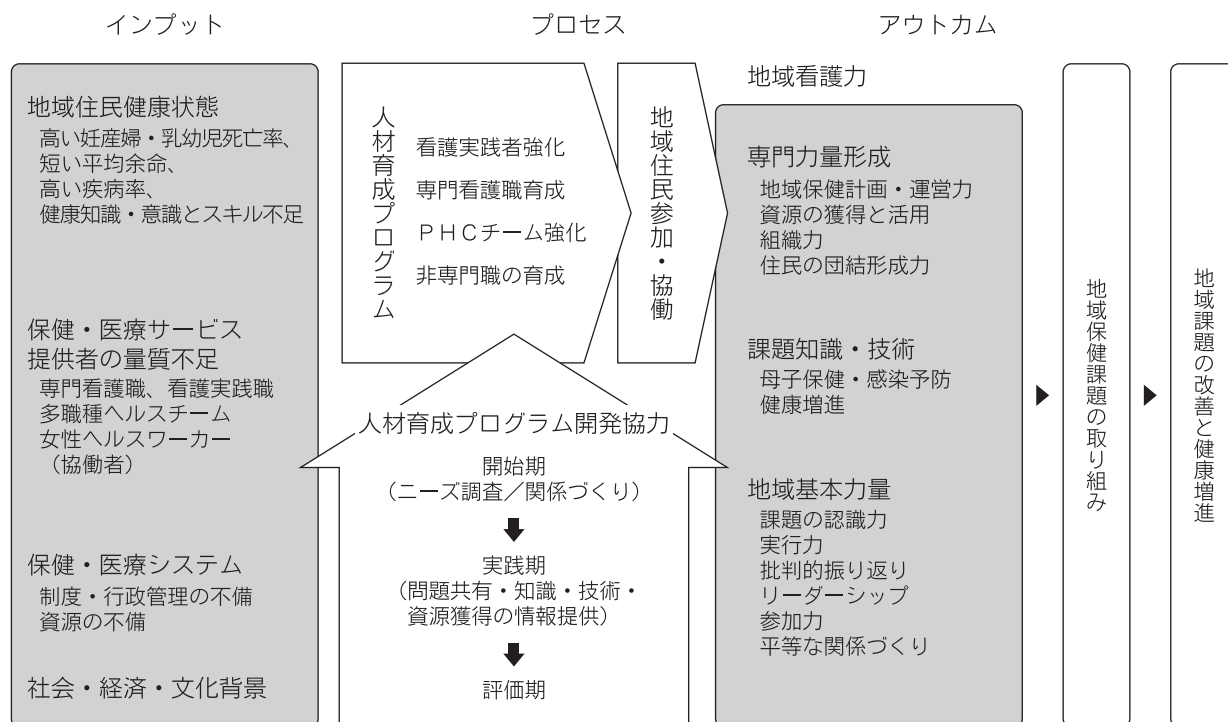


図1 開発途上国の看護・助産人材育成協働モデル試案

看護学部をカウンターパートとし、看護学部長（薬剤師）を招いて地域看護のリーダーとなる看護師育成のための学部カリキュラムを作成した。その目的は、カリキュラムを作成する過程で看護の概念を確認し、アフガニスタンに適した看護教育のゴールを設定することで、アフガニスタンの看護教員（マンパワー）の看護教育におけるエンパワメントを行うことである。7日間で看護学部4学年のカリキュラムを作成した。

アフガニスタンの現状では、都市部の看護大学を除き、地域や家庭で孤立している人たちへの小児，成人，精神看護が重要であることから、それらカリキュラムに反映させる予定である。カリキュラムは作成する段階より、教育でそれを実現するほうが難しいので、その成果を示していくことが今後の課題である。

IV. 開発途上国における地域看護力強化のための人材育成協力

1. 看護・助産人材育成協力過程における共通要素

上述した5カ国における看護専門・非専門職、あるいはPHCチームの人材育成協力の実践研究成果から、その協力方式を統合した。協力活動の方法・内容は、それぞれの協力の段階開始・実施・評価と異なっているために違いがあり、それぞれの人材開発協力の中で、地域看護人材の強化すべき力量を探索するため、それらの実践研究活動での共通する要素を、下記の4視点から検討した。

- (1) 研究班が係わる人々と組織（住民，ヘルスワーカー，カウンターパート，研究組織）
- (2) 研究班が関わる活動（教育・トレーニング・教育システムとその成果のモニター評価）
- (3) 実践研究活動効果
- (4) 活動上の協力過程に生じる課題

その結果、5班の看護・助産人材育成協力過程での共通要素が抽出された。すなわち、

課題としての住民の健康状態とヘルスニーズ
協働者としての専門・非専門家（ヘルスワーカー）との協働者
アプローチとしての教育・トレーニングとその評価
人材開発協力過程における関係性（緊張と相互扶助性）

である。

特筆すべきは、「領域の人材開発協力過程における関係性」であり、力量形成領域としても重要であると考えられる。

2. 地域看護人材の力量領域

開発途上国での地域看護人材育成の協力は、協力者とカウンターパートとの協働活動であり、協力者とカウンターパート間で、それぞれ知識・技能・経験の共有があり、力量が形成されていくと考えられる。ミャンマー、ケニア、アフガニスタン、フィジー、南アフリカの各班間での統合化の過程において、地域看護人材の力量に共通する項目が見出された。

地域看護を強化する地域看護の専門・非専門ヘルスワーカーの力量に共通する項目は、(1)基本力量、(2)課題の知識・技術、そして(3)専門力量、の3領域に分類された。

(1)地域看護人材の基本的力量としては、協働活動での平等な関係性での参加と、リーダーシップ、批判的振り返りによる、課題の認識力と改革の実行力があげられた。

(2)健康課題の知識・技術として、特に、母子保健、感染予防、生活習慣病対策と健康増進、が見出され、(3)専門力量は、住民の団結形成、組織化、資源の獲得と活用、地域保健計画・運営があげられた。

これらの要素を、研究の枠組みに沿って配置し、2006年度のモデル試案（図1）を作成した。地域看護人材の力量が形成されることが地域看護力となり、各開発途上国における「地域保健課題への取り組み」がなされ、「地域課題の改善と健康増進」をもたらすと考えられる。このモデルを踏まえ、最終年度である2007年度の研究成果において検証し再統合して、最終の「開発途上国における地域看護人材育成モデル」を提言する予定である。

謝 辞

本稿を執筆するに当たり、「開発途上国の地域看護のあり方に関する研究：国際ワークショップ2006」において貴重な助言ならびにご指導をいただきました Dr. William Holzemer, Dr. Barbara A Parfitt, Dr. Caroline White に感謝申し上げます。また、本研究の活動におけるカウンターパートである Dr. Anna K. Karani (University of Nairobi, School of Nursing Sciences), Dr. Shamsulrahim Rahim (Dean of Nursing Faculty), Dr. Sherin Aqa Zarif (Academic vice-chancellor of KMU, Professor), 2006年度 WHO 委員会、林亜希子氏、梅田麻希氏のご協力にも、心より御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 田代順子, 堀内成子, 平野かよ子, 熱田泉. (2005). 国際医療協力研究委託費「開発途上国の地域看護のあり方に関する研究」2005年度研究報告書.
- 2) World Health Organization. (2006). The World Health Report: 2006: working together for health. Geneva, World health organization.